

## 第63回舞踊学会大会概要

### 「ダンスの拡張 / ハルプリン以後」

2011年12月3日・4日  
彩の国さいたま芸術劇場

#### 大会概要

第63回舞踊学会大会は12月3日(土)4日(日)の二日間、埼玉県芸術文化振興財団彩の国さいたま芸術劇場を会場として開催された。世界最先端の舞踊公演で知られる当劇場との提携を得て、映像ホール・大練習室・会議室等のスペースのみならず、専門スタッフの方々の惜しみない助力が提供され、大会運営に益するところが大きかった。

今回の大会企画は、すべての人に開かれたダンス、「生の技法」としてのダンスの可能性を考えるために、アナ・ハルプリン(Anna Halprin)に照明を当てるのが実行委員会によって決定した。

#### 一般研究発表

一般研究発表は3日の午前中に11本、4日は午前11本、午後3本、計24本が、映像ホールおよび会議室2・3において、前掲プログラム通り行われた。

#### 大会企画

大会企画としては初日に特別講演とワークショップ、二日目にシンポジウムを開催した。

特別講演第1部では、ハルプリンの活動について専門研究者の立場から木村覚氏、昆野まり子氏による講演が行われ、第2部ではハルプリンのタマルパ研究所講師陣のひとりであるジェイミー・マヒュー(Jamie McHugh)氏を迎えて講演とワークショップが行われた(司会は外山、通訳は中島)。

二日目のシンポジウムはケイ・タケイ氏、若松美黄氏、樋口聡氏をパネラーに迎え、細川の司会によりハルプリンが示唆した舞踊と身体の問題をめぐっての討論が行われた。

#### ■特別講演

第1部木村覚、昆野まり子両氏による特別講演の原稿は、シンポジウムのまとめとともに本号に掲載されているので、ここでは第2部のマヒュー氏による講演と第3部ワークショップについて主要なポイントのみ整理して報告する。

「動きの自然(本性)、自然の動き:すべての身体のためのダンスを目指すハルプリンのアプローチ」という講演タイトルにもあるように、「誰もが皆ダンサーである」「ダンスは人間の生得の権利」というのがハルプリンの活動を語るときの基本命題である。舞踊・演劇・音楽・美術等が未分

化の、小さい子どもが示す、世界に対する全心的な関わり方がそのモデルとなる。

「特定の文化による振付に従う」のではなく「境界を越えていく可能性」を求めて、様々なコンヴェンションに挑戦する—これはイザドラ・ダンカンの系譜にハルプリンをつなげるものでもある。「小さい子どもたちにもまず、息をすること、感じることを、自然全般の調和や運動とひとつになることを教えよう。ニーチェは、踊れない神を信じることはできないと言った。彼はまたく踊ることなく終わった日は失われた一日と見なそうとも。何もピルエットができるかどうかではない。動きにおける生命の高揚のことを彼はダンスと言ったのだ」(ダンカンの言葉から)。



＜特別講演：マヒュー氏と通訳の中島奈那子＞

「美しい」とされるダンス、高度な技法や特定の身体的条件を要求し、観客に感銘を与え消費を促す高尚な舞台芸術としてのダンスを否定するものではない。しかしそれだけだと、多くの人々はダンスのなかに入っていくことができないままで終わってしまう。「身体の基本的な風景から動く」ことで、多様な文化に共通する動きの言語を創り出しながら、ハルプリンは各自の生態系/エコシステムに応じて現れるユニークな変異を認める。「ダンスは自分自身との、お互い同士の、周囲環境との関係を捉えるもの」なのであって、ときには動きが小さければ小さいほど、それを感じ取り、スペースを捉え、すべてのものとのコネクションを確認することができる。

ハルプリンはまた「小さな箱から出て、周囲の環境が告げるものをダンスに取り入れよう、世界全体がスタジオになる」という。自分の身体がより大きな自然の身体の中かで、自然に応答しながら動くにまかせるとき、私たちは皆それ自体呼吸し動いてやまないこの惑星の一部だということを思い出す。産業化のプロセスによって忘れられる傾向にある自分のなかのこの自然/本性(nature)のリアリティを取り戻すこと。(マヒュー氏自身、「海のすぐ近くに住んでいることがどんなに恵まれているか、毎日心にとめている」という。「海岸に行って、砂の上に横たわり、呼吸する。ヴァーチャルな世界からプラグを外して、自分の身体に

戻ってくる。自分がどこにいるのかを思い出す。大洋が語りかけ、私の呼吸の一部になる。それはもう、美味なダンス・クラスだ。)

続いて横隔膜の動きに焦点を合わせてゆっくり深い呼吸をすることで副交感神経優位のリラックスした状態を作り出す練習を行った。「受け取る、耳を傾ける」とりわけ「自分自身のセンセーションに耳を傾けること」。呼吸とともに身体内部に現れる「密度」と「空間」の交替する垂直方向の感覚、外部空間が水平方向に入ってきてまた出て行く感覚、その複合を「ソーマティックなマントラ」として、一種の「気付き（マインドフルネス）の瞑想」に誘導した。マヒュー氏による自然の景観をアブストラクトに撮影した映像のスライド・ショーによって、「小さい箱から出て」自然のリアリティにじかに触れ合う経験への誘い、あるいはその想起が試みられた。

### ■ワークショップ

ハルプリンが夫のローレンス・ハルプリンとともに開発した集団による創造活動のための方法であるRSVPサイクルの簡略版を実地に経験する機会となった。

まず、手を使って自分の身体に触れることで身体感覚を活性化する手法が紹介され、さらに呼吸の層を意識し音声化する手法が加えられた。

- ① 一定の部位に手を置く (targeting)
- ② 部位から部位へと辿っていく (tracing)
- ③ タップして波動／脈動を捉える (vibration / pulsing)
- ④ 静止の状態を保つ (stillness)
- ⑤ 呼吸、特に吐く息を様々に変化させる
- ⑥ 音声化 (ハミングと開母音の発声を交互に試し、骨や筋肉の共振を意識する)
- ⑦ 身体の周りの密度 (「気」) の変化を捉える (hovering)

これらが各自の用いる「resources (資源)」となり、途中でそれらをどのように感じたか、自分の参加の仕方について小グループに分かれてシェアする「valuation (評価行動)」を行った後、「score (スコア)」が示され、それを実演する「performance パフォーマンス)」が続いた。

「スコア」は「息を吸うときには静止、吐くときに動く」というもので、①～⑦を各自が自由に用いるパラレル・プレイが促された。その意図を示すものとして引用された詩の一節：

You do not have to be good.  
You do not have to walk on your knees  
For a hundred miles through the desert, repenting.  
You only have to let the soft animal of your body love what it loves. (Mary Oliver)



＜ワークショップのようす＞

マヒュー氏のワークショップでは、身体の動きはいつも一番最後にくる、という。「感覚が十分目覚めるのを確かめてから」動きに入る。呼吸も動きであり、したがって静止の状態もまた動きであるということが確認され、「最後の息を引き取る瞬間まで、私たちはみなダンサーです」という基本テーゼが繰り返される。講演中、「発言して音を出せるようになって、やっとダンスを習うことができる」というエリック・ホーキングの発言が紹介されたが、呼吸に音を与えることで身体(の失われた／抑圧されたなにか?)を回復することの意義にも注意が促される。「身体が最初Body first!」という彼の主張は端的にハルプリンのアプローチの神髄を示唆していると言えるであろう。

大会直前に撮影されたハルプリンと即興で踊るビデオのなかで、ともに波打ち際まで進んでいくふたりを見て「(当時91歳の)アナに、別れを告げる、そのことを始めるためのリチュアルだったと気づいた」とマヒュー氏は語った。「あとで振り返ってみて、何がそこに起こっていたのかを見ることは非常に大事である」。RSVPサイクルは基本的に閉じることのないスコアのためのダイナミックな過程であろう。マヒュー氏の講演／ワークショップは、彼自身の身体的現前や映像によって、北カリフォルニアの大洋から吹き寄せる風とともにハルプリンのスピリットを伝えようとしたものであって、言葉の記録はごく限定的なものでしかないが、valuationのよすが、叩き台のひとつとして使っていただければ幸いである。

### 総会と懇親会

3日のワークショップ終了後、2011年度の舞踊学会総会が行われた。その後劇場内の「ビストロやま」で懇親会が開催された。

(文責 外山)

### □ 第63回舞踊学会大会実行委員会

委員長：外山紀久子 副委員長：細川江利子  
委員：國吉和子 貫成人 八木ありさ (以上、  
担当理事) 野田寿美子 中島奈那子